二〇二五年度　一般入学試験　問題（国語）

次の文章は、劇作家・山谷典子のエッセイ「ふつうでいるために…という努力」である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

「保健室にくる子は、よく喋ります。」

一六時半。a ホウカゴの掃除も終わって少し静かになってくる時間帯。お邪魔した中学校の保健室で養護教諭のS先生は言いました。「それはどうしてだと思いますか？」という私の問いに「やっぱりね…。私たち養護教諭は生徒たちの成績を知りませんから。だから、楽なんだと思いますよ。」

自分の中学、高校時代を思い返すと（たしかに…）と思い当たるのです。成績、イケてるかどうか（容姿）、お金持ちかどうか、彼氏がいるかどうか…。あらゆる評価を背負って、私も同級生も教室に存在していたなあ…と。

「青春だなあ、羨ましいなあ。」と周りの大人から言われながらもピンと来ていなかった中学、高校時代。その「青春」時代を、世界中を覆いつくしたコロナという渦に巻き込まれた子どもたちは、どう過ごし、どう感じ、どんな大人になっていくのだろう…。その思いから、劇作家である私はコロナ禍の中学生を中心とした物語を書こうと決め、中学校の保健室に取材へ行き始めました。

学校でも家庭でもないもうひとつの場所（大人の場合は学校が仕事場となります）が人間には必要だと言われ始めていますが、それはS先生もおっしゃっていた「評価されない場」が必要だということなのだろうと思います。評価のために睡眠時間を削って勉強してテストの点数をあげたり、やりたくもない係を引き受けたり、面白くもないのに笑ったり、都合の悪いことを隠したり…。もちろん努力は素晴らしいことなのですが、それが自ら選んだ努力なのか、無理をしているだけなのか…なかなか見極めは難しいと思います。

私には五歳の子どもがいます。b フダンは（とにかく遊びたい。遊び続けたい。）という欲求から、眠ることを嫌がります。ところがある日、「俺はちょっとひとやすみする。」と、自ら布団に入って眠った日がありました。食いしん坊の息子が夕飯も食べずに？　不思議に思っていると、入眠して一時間後に発熱。何度か水分を摂りながら朝までぐっすり眠りました。すると翌朝、薬も飲まなかったのに平熱に戻っていたのです。①子どもは本能に忠実なので、動物レベルで「ひとやすみ」が必要と判断したのだと思います。

学校に行くようになり本格的な集団生活と時間割で過ごすようになると、自分の欲求よりも「 i 」を優先させなければならないことが増えていきます。社会の一員として「 i 」を守る練習は必要だと思いますが、やはり時に身体や心が悲鳴を上げるのだろうと思います。

実際に保健室にお邪魔してお話を聞かせてもらうことが多かったのですが、S先生の取材中にも「先生～！」と生徒が何人か保健室を訪れ、そのたびにS先生は「ちょっとすみません。」と生徒の対応をしていました。ちょっとした怪我だったのでしょう、手当を受けながらおしゃべりする可愛い声が聞こえていました。「すみません、たびたび中断しちゃって。」と笑うS先生でしたが、「本当に心配な子は保健室に来ないんです。来てくれ

さえしたら…。」とおっしゃっていました。コロナ禍で、生徒が抱える問題が見えにくくなっているというのは、皆さん共通しておっしゃっていました。

ヤングケアラーも見えにくい問題の一つだそうです。お手伝いの一環と認識していることもあり、本人が自覚していないことも多くあります。c カコクな状況を耐え、健気(けなげ)に頑張っている子どもの姿がd ビダンとして伝わってくることがあります。子どもの権利を享受できていない子の存在を伝えていくのは大切なことです。が、「ふつうの家庭」の枠からはみ出した特別な子の話であり、家庭内の問題である以上他人は踏み込んではいけないだろう。そんな言い訳をしながら、「ふつうの家庭」にいる私は、一段上の階段から同情だけしていたのではないか…。と、取材をしていく中で感じました。

コロナ禍の公立中学校の保健室を舞台として書いた「さなぎになりたい子どもたち」(演劇集団 Ring-Bong) に中学生は三人登場します。遅刻常習犯の劣等生の凛と、前髪で顔を隠す優等生の天音、スポーツ万能の青木。凛はヤングケアラーであり、経済的な理由と母親を見捨てられないという呪縛から自分の人生を選択できない環境にあり、天音は中学受験失敗組で、ハイソでe カカンショウな母親によって自分の人生を決められなくなっています。

書いていくうちに、登場人物の天音のイメージが、以前相談を受けた母校の後輩と重なっていきました。私の母校はバリバリの進学校でして優秀な同級生が山のようにいます。私自身は学年でたった一人、センター試験を受けずに劇団文学座の研究所に進み、文学座の座員として俳優の活動をしていました。そんなある日、後輩から相談したいことがあると連絡がありました。劣等生で、進路については全員の先生から反対されていた問題児の私に相談？　と不思議に思いながら待ち合わせた喫茶店に行くと、「私も演劇の世界に行こうかと思うんです。」と、彼女（Aさんと呼びます）は真面目(まじめ)な表情で言いました。話をしていくと、周りの反対を押し切ってまで演劇がしたいというわけでもない…。「なぜ演劇なの？」と問う私に、Aさんは、両親もお姉さんもT大出身という家族の中で、自分だけが私立のK大学に進学したことにコンプレックスを持っていることを話し始めました。（K大学でコンプレックスってなんのこっちゃ？）と脳内が混乱する私。優秀なのに全く自信を持てないAさんと話しながら、大人と呼ばれる年齢になっていても、自分の家族が「ふつう」であり、その「ふつう」の尺度で価値を決めるという構図は変わらないのだなあ…と感じました。自分の中で作られている「ふつう」は、家族、周りの友達、クラス、学校…と、実はとても視野が狭い範囲からできていることが多いと思います。と書いている私も、視野の狭い「ふつう」という沼にハマっておぼれそうになったことが何度もあります。

一番最近の沼は、「母乳」問題でした。出産前から、完全母乳（赤ちゃんを粉ミルクを使わずに母乳だけで育てること）を目指して準備をしていた私でしたが、もともとの貧血と出産時の大量出血のため、母乳が思うように出なかったのです。母乳がふんだんに出るママを心底羨ましく思い、嫉妬(しっと)し、自信をなくしました。が、母乳を子どもが飲むのは長くても三年くらいで終わるんです。なのに、どうしてあれだけ（時には泣くほど）悩んだのか…。赤ちゃんが「ふつう」に育っていけるように、完璧(かんぺき)な栄養素を備えた母乳を増やすように…。大好きなコーヒーもカレーも（母乳がまずくなるらしい）ケーキも（f ニユウセンが詰まるらしい）我慢して、大量に水分を摂って頑張っているのに母乳は増えな

い…。

産科の治療室に行くのは、体重コントロールなど（母体の体重が増えすぎるといけない）怒られるかもしれないので憂鬱（ゆううつ）でしたが、隣にある助産師外来の部屋に行くのは楽しみでした。そこは、自分の身体がみるみる変化していくことに不安を抱えたママがなんでも相談できる空間です。愚痴も悩みも聞いてくれる助産師さんのことを、私は何度も［ii］だと思いました。この時、産科の治療室が［iii］だとしたら、助産師外来の部屋は保健室のようだなと感じたのです。中学生もまた、自分の身体がみるみる子どもから大人へと変化していく時期です。不安もたくさん抱えています。その時、相談できる場、［iv］できる場、それが保健室なのだろうと思います。

学校を舞台にして［g シッピツ］するのは、「さなぎになりたい子どもたち」で三本目ですが、取材する度に先生方が子どもたちと向き合う時間が削られていくように感じています。「本当は、担任の先生が生徒のＳＯＳを発見できる方がいいんですよ。だって、私たち養護教諭より、担任の先生の方が多くの時間を生徒と過ごしているんですから。」というＳ先生の言葉にも、そのことが現れているように感じます。

自分が生徒だったころ、学校の先生は授業中が仕事と思っていました。が、演劇科の授業を受け持つようになりまして、むしろ授業の準備の方が大変かもしれないということに気が付きました。授業の準備は戯曲を書くときと似ていて、戯曲の時は観客、授業の時は学生のリアクションを想像しながら、構成を考えます。私の場合、本番を客席から観（み）ている時間にお客様の反応で勉強できることが多いです。（面白い授業じゃないから、勉強がつまらない。）と生徒が感じてしまう問題は、教師が生徒のことをしっかり［h ハアク］する時間を取れていないからかもしれません。公立では特に、生徒の理解度の差は［i イチジル］しいわけですから、先生は本当に大変だと思います。

私が講師をしていての実感ですが、受け持つクラスが三〇人を超えるとどうしてもすぐに顔を思い出せない子が出てきてしまうんです。これを、保護者の側から考えてみると…担当する先生が自分の子どもをはっきり覚えていないだなんて冗談じゃありません。教師が一人一人の生徒と向き合う時間を増やすために、行政は予算を使ってほしいと切に思います。

「ふつう」という言葉から、あてはまる範囲は広そうに感じますが、ストライクゾーンは狭いです。「ふつうの女子中学生」…東京［j キンコウ］の住宅地にあるマンション３ＬＤＫに、父、母、兄、自分の四人で暮らす。車一台、犬一匹。成績は中の上。国語が得意で理科が苦手。中学三年間のうち、発熱で四回欠席。遅刻は一回。しっかりしているがそそっかしいところもある。母と兄とは喧嘩（けんか）もするが仲は良い。父は自分には甘い。

…すみません。完全に私の独断と偏見で書きました。「ふつう」と呼びながらも、「世間的に合格とされる基準」を「ふつう」と呼んでいると思うのです。（中略）

誰が決めたか分からない「ふつう」という狭いストライクゾーンに入るために、無理をして体や心の悲鳴を聞き逃してはいないだろうか。「ひとやすみ」は必要ないだろうか。「ふつう」を手に入れられたとして幸せなんだろうか…。

海外で異文化コミュニケーションによって、自分の悩みが小さく視野が狭かったことに気が付くというエピソードはよく聞きます。しかし、コロナ禍に広がり続ける経済格差の中、誰もができる異文化コミュニケーションはないだろうか…。それは、世代も環境も違

う人とのおしゃべりじゃないかと考えます。そのおしゃべりに大事なのは、自分と相手との間に上下関係などのパワーバランスが存在しないことが大切です。評価もパワーバランスもない保健室は、私たち大人が想像するよりももっと大きな役割を担っているように感じます。

そう考えながらS先生と話し続けていると、あっという間に外は暗くなっていました。「そろそろ失礼しないと…。」と私が腰を上げようとすると、再び保健室に可愛い声の生徒が来室しました。保健室の窓から見える運動場でサッカー部が片づけをするのを見ながらS先生を待っていると、「さようならー。」と声が聞こえ、生徒は帰っていきました。「今の子、可愛い声でしょう?」とニコニコと言うS先生。「あの子、身体は男の子なんです。心は違うんですけどね。いつ、話してくれるかなあ…。」

自分の心に無理をしない。それには受け入れてくれる場所と人が必要。②可愛い声のあの子はこの学校でよかったな…。そう感じながら学校を出て自転車を走らせると、散り始めた桜の花びらが舞っていました。

（設問）

問一　[a]〜[j]のカタカナを漢字になおしなさい。

問二　空欄i〜ivに最も適当な言葉を入れなさい。その際、i・iiには次の選択肢の中から適当なものを一つ選んでその記号を、iii・ivには本文中にある言葉をそれぞれ入れなさい。

i　ア　決まり　イ　クラス　ウ　順番　エ　時間　オ　目標

ii　ア　姉　イ　神　ウ　師　エ　敵　オ　友

問三　傍線部①に「子どもは本能に忠実なので、動物レベルで「ひとやすみ」が必要と判断した」とあるが、中学・高校生の場合はどうか。そのことが最も端的に表現されている一文を抜き出し、その初めと終わりの五字（句読点を含む）を記しなさい。

問四　本文中の、Aさんの相談と筆者の「母乳」問題とは、どのような点が共通しているか、四〇字以内で説明しなさい。

問五　傍線部②「可愛い声のあの子はこの学校でよかったな…」とあるが、筆者はなぜそう思ったのか。四〇字以内で説明しなさい。

問六　波線部「「ふつう」を手に入れられたとして幸せなんだろうか…」について、次の設問に答えなさい。

（1）本文の趣旨からするとどうか、次の記号で答えなさい。

ア　幸せである　イ　幸せではない

（2）その理由を、四〇字以内で説明しなさい。なお、理由はいくつか考えられるが、解答するのはそのうちの一つでよい。